

整備の進捗状況について

○H24年度までは主にルート等の事前調査や観測機器・ケーブル等の製造

○H25年10月に房総沖システムの海底ケーブルの敷設完了



製造された観測装置



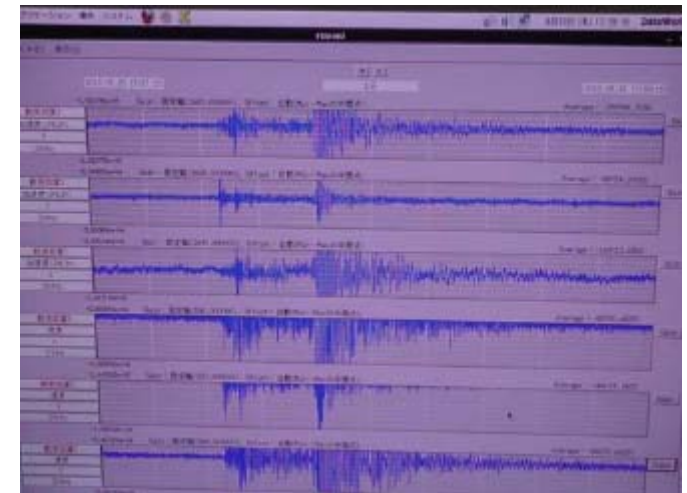
陸揚げ作業風景



敷設船に積み込まれたケーブル



観測装置の投入



テスト中に捉えられた地震

耐障害性について

リスクとその対応

要因①ケーブルの切断

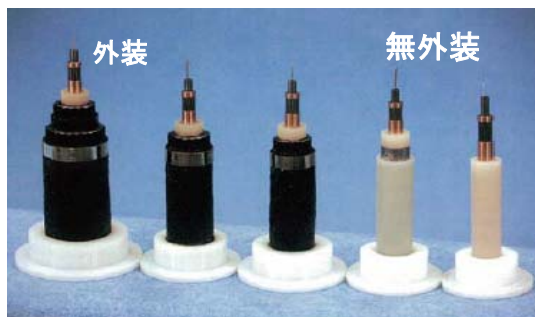
- 事前の調査により、海底地滑りなどのリスクのありそうな場所を避けるようにケーブルルートを選定。
- 底引き網等がケーブルに引っかかる可能性があるため、水深1500m以浅の海域ではケーブルを埋設。
- 使用する海底ケーブルの太さは、場所によって外装を使い分け(浅い場所ほど外装を厚く)。
- ケーブルの両端を陸揚げ双方向伝送とすることで、ケーブル切断時や陸上局の被害があった場合においてもデータ取得可能に。

要因②陸上局の被害

- 津波被害に備えて、陸上局は可能な限り標高の高い場所に設置。
- 停電に備え、1週間程度給電可能なよう非常用電源を設置。

要因③観測機器の故障

- 1つの観測装置の中に、地震計や水圧計(津波計)を複数セット用意。



海底光ケーブル

